

日本看護歴史學會 會報

日本看護
歴史学会
第59号
2013年2月1日

事実を見る目を曇らせず次代へのバトンを

日本看護歴史学会理事長 川嶋みどり

「ごめんなさい」というそのひとことが言い出せずに、小さな心を苦しめ居心地の悪い思いをした幼い頃の体験は誰にもあることでしょう。失敗や過ちをおかした場合、率直に認めて謝ることが、その後の人間関係に影響するようなエピソードは、職業人になってからも少なくありません。

あの原発事故から600日以上を経てなお、未だに事故前の暮らしを取り戻せぬまま不安と絶望に生きている人びとの姿があります。そこに住んでいただけで、放射能汚染値に怯えながら子育てする不条理さ、決して特定の地域のこととして傍観してはならないと思います。そうした中、原発再稼働の選択が国の繁栄の道と大見得を切った政治家もいました。そして、事故を起こした企業の真摯な謝罪を未だ聞きません。

それにつけても、「医と倫理」をテーマにした国際シンポジウム（2012年11月、於京都大学）は、15年戦争（満州事変から太平洋戦争まで）後の日本と、第二次世界大戦後のドイツの戦後検証の比較をするというものでしたが、戦争の記憶が薄れつつある現在、改めて史実に基づく証明の力を実感しました。戦時とは言え、「医学研究」に名を借りた非人道的な行為には、胸が痛み目を覆いたくなりましたが、日本の場合、残忍な人体実験や細菌戦の謝罪も賠償も不十分な事実が浮き彫りになりました。これらが、中国や韓国との外交問題にも少なからず影響しているのとは見過ぎでしょうか。

原発事故への対処も戦後処理の仕方も、生命の尊厳への畏敬という人類共通の根本理念

に立ち返って見る必要があると思います。宗教学者の島藺氏が「自然を力でねじ伏せ富をもぎ取る側と、自然からの恵み、いのちの循環を尊ぶ側との価値観の違い」と述べているように、どちらの側に立って評価するかが問われていると思います。こうして歴史的事実を見る目を曇らせないようにすることも、これからの歴史研究には欠かせないこと言うまでもないでしょう。

人間の一生の四大ライフイベントといわれる「生・病・老・死」のすべての局面で直接関わる職業としての看護の価値観は自ずと明らかです。あの震災と原発事故を契機に、医療のありようが問い直されている時、近代医学に寄り添って発展して来た看護もまた、本来の姿に向かって軌道修正すべき時です。在院日数の短縮で、早々に在宅療養に移り当惑の日々を送る当事者とその家族の苦悩。手術は成功したとは言え、再発や転移に恐れるがん患者。孤独な高齢者や老々介護に明け暮れる人びと。

「歴史を創るのは、今、生きている私」の自覚を新たに、現在進行中の社会の事象のあれこれと、当事者のナラティブの記述を抜きに、看護歴史研究はあり得ないと思います。このニューズレターがお手元に届く頃、新しい国を担う人びとの顔ぶれが一応定まっていることでしょう。どのような体制であろうと、真実を見る目を曇らせることなく、誇り高く次代にバトンをつなぐための研鑽をいたしましょう。

新春にあたり、みなさまの更なる歴史研究の発展をお祈りいたします。

第27回学術集会の開催について

第27回学術集会長 岡山寧子

第27回学術集会は、2013年8月31日（土）・9月1日（日）、京都府立医科大学（京都）での開催となります。今回のテーマは「京都発、近現代における看護の礎を探る」です。

昨年、京都府立医科大学は創立140周年を迎えました。その記念として、創立当初の大学正門が少し現代風ではありますが、みごとに復元されました。そのレトロな門灯が大学の歴史の重みとこれからの発展をみまもってくれているようです。府立医大の看護教育も120年を越え、その道のりを振り返ると「今」そして「これから」のあるべき姿がおぼろげながら見えてくることに気づきます。最近の京都は、後発ながら看護系大学も少しずつ増えて高等教育化がすすみ、社会の流れに沿った変化を実感しています。

今、京都から何が発信できるだろうか……そんな視点に立ち、少しずつ学術集会の内容をかためています。京都看病婦学校や京都府

立医大の看護教育のはじまり、京都初の看護の高等教育のはじまりなど、明治時代から現在に至る京都における看護の足跡から、その礎を探っていただければと考えております。

また、京都にゆかりのある、今年のNHKの大河ドラマ「八重の桜」の主人公新島八重についての講演をしていただくことを計画しています。八重の篤志看護婦としての足跡から、看護歴史の側面もお話しいただく予定です。彼女の夫新島襄が設立した同志社大学は御所北に、新島旧邸は御所東にと、ゆかりのある地がいずれも学会場である府立医大のすぐ近くに位置しております。学術集会の合間に散策されることをぜひおすすめいたします。

開催が8月末とはいえ、まだまだ残暑きびしい京都だと予想しています。汗をかきながら、看護の過去・現在・未来について熱く語り合えればと願っております。皆様の多数のご参加・ご発表をお待ちしています。

第26回学術集会を終えて

第26回学術集会事務局 川原由佳里

記憶はもうはるか遠く、平成22年夏の慶応で行われた理事会の席であったか、「あなたが事務局をやるのなら(会長)引き受けるわよ」との川嶋みどり先生のお言葉に肯首して決まった日赤での開催だった。第2回、第4回に続く、3度目の日赤での開催である。

明けて平成23年1月には、第1回の企画委員会が開催された。川嶋会長を筆頭に、安達祐子氏（日本赤十字学園）、鈴木紀子氏（東京女子医科大学病院）、竹森志穂氏（健和会訪問看護ステーションしろかね）、刀根洋子氏（目白大学）と、日赤の山崎裕二氏、鷹野朋実氏、樋口佳栄氏、高橋朋子氏、そして私がメンバーとなった。

テーマはその後の3.11東日本大震災を受

けて、「災害の教訓から改革へ—私たちは何を伝えるべきか—」に決定した。川嶋会長はご自身も被災地にてケアハウスをはじめ、さまざまなプロジェクトを展開され、頑張っておられる。未だ復興の途上にある被災地の人々の気持ちに寄り添いつつ、将来のために東日本大震災や原発の事故をめぐる医療や看護の現状をつぶさに記録に残したい、それを通じて看護本来の役割と機能についての議論を巻き起こし、将来の方向性に向かって改革する推進力を生み出したいという思いが伝わった。

会長の強い思いに励まされ、企画委員一同、広報やシンポジウムの企画、抄録の査読・編集、運営、参加登録や会計業務によく働いた。そのおかげかプログラムは種々企画が目白押し



学術集会長 川嶋みどり

となり、贅沢な内容となった。会長講演、特別講演、シンポジウムに加え、テーマセッションが6、理事会や特別委員会のセッションが3、ワークショップが2、研究発表（口頭8、示説14）である。今回の災害をさまざまな立場で体験された看護職の方々の生の声を聴くことができ、アンケートからは「時間と中味で考えると2回立てくらいで聞きたかった」「インパクトが強かった」「何かの手助けがしたい」との声があがっていた。どの企画も素晴らしい内容であり、参加者から「この学会

を通じてよい刺激を受けた」、「看護歴史を深めたいとなりました」という声も聞かれた。

例年通りの1日半の会期だったが、上のような事情で、参加者同士での交流があまりもてなかったことが残念である。今後は、様々な見識を持つ方々とテーマや研究をめぐって議論を深める場をつくること、より若い年齢層の方々に歴史への関心を高めてもらうような内容を含めていくことが課題だと思う。さいごに、学術集会にあたって、大勢の方々のご協力とご配慮をいただいたことに心より感謝申し上げたい。



ストラップが繋ぐウガンダへの支援

第26回学術集会の会場の一角をお借りして、東アフリカのウガンダ共和国のTORUMU



（女性の自立を目指す団体）とMabanda小学校の子どもたちが作ったストラップやペーパーネックレスを販売させて頂いた。私が2008年に公益財団法人国際看護交流協会（INFJ）主催の研修で、ウガンダに看護記録を教えに行ったことが縁で始めたボランティア活動である。

売上は、子供たちの学費の支援、学校の図書、HIVの女性の治療薬、孤児たちの洋服などの購入に充てられている。

大事なことは定期的な収入として生活を安

東京女子医科大学病院 鈴木紀子

定させてあげることである。自分が作った物を買ってくれる、また注文してくれる、その喜びが希望を与えている。

2日間の売り上げは3万円、その半額を学術集会への寄付として、東日本大震災に関する義援金とすることができた。後日、売り上げでブランケットを50枚購入したとの報告と、写真がウガンダからメールで届きました。皆様の心に感謝します。ありがとうございました。



五史学会に参加して

日本赤十字看護大学 川原由佳里

12月8日(土)順天堂大学にて、医学、薬学、獣医学、歯学、看護学の歴史学会に所属する会員による合同12月例会(五史学会)が開催された。テーマは多彩だが、いずれも長い年月を通じて資料を獵歩し、分析し、まとめあげられた内容で、短期間に成果のみを求めようとする研究では成し得ない深みがあった。私は「第二次世界大戦におけるビルマの兵站病院と日本赤十字社救護班」というタイトルでこれまでの研究成果を発表させていた

だった。先の戦争が看護界に与えた影響は一言では語りきれないが、その歴史的事実を克明に描きだし、いつかそれらの事実に対する一研究者としての自己の考えを語りたい。懇親会では各学会代表からの挨拶があり、本学会からは田中幸子編集委員長がご挨拶をされた。歴史研究の楽しみを分かち合い、得るものの多い学会だった。参加の機会を与えてくださったことに感謝したい。

新入会員紹介(敬称略)

* () 内は会員番号 平成24年6月~11月入会

杉山 敏子 (12031)	佐藤 清江 (12032)
阿部あかね (12033)	直井 久枝 (12034)
渡邊 光代 (12035)	宮原 保義 (12036)
山本久美子 (12037)	小松 妙子 (12038)
竹下美恵子 (12039)	渡邊 郁子 (12040)
岡本 千尋 (12041)	

お知らせ

■事務局から

平成24年度会員動向(平成24年11月30日現在)

1. 会員数(特別会員1名を含む) 359名
2. 入会者数 41名
3. 退会者数 7名

会費納入のお願い

平成24年度会費(6,000円)をまだ納入されていない会員の方はすみやかに納入をお願いいたします。事務局からお送りした払込取扱票を紛失された場合は、郵便局にある払込取扱票に口座番号「01010-1-52185」、金額「6000」(ただし、2年分未納の場合は12000)、加入者名「日本看護歴史学会」、通信欄に「会員番号」、ご依頼人の欄に「郵便番号・住所・氏名・電話番号」をご記入いただき、窓口かATMで払い込みください。3年間会費滞納の場合、退会となり会員資格を失いますのでご注意ください。

所属・住所変更や退会の場合

所定の変更届や退会届(本会ホームページからダウンロードできます)を事務局にご提出ください。

学会誌投稿論文の送り先

投稿論文の送り先は事務局ではありません。

〒990-9585 山形県山形市飯田西2-2-2 山形大学医学部看護学科 田中幸子(日本看護歴史学会誌編集委員会)宛ですので、お間違えのないようお願いします(今年度も何人かの方が事務局に送付されています)。

学会誌バックナンバーの販売

事務局が保管している学会誌と学術集会講演集のバックナンバーを会員・一般の方に販売します。詳しくは学会ホームページをご覧ください。

編集後記

歴史会報59をお届けいたします。理事長の年頭所感、第26回学術集会の報告、第27回学術集会のお知らせを掲載しています。震災から時間が経過し、本当のニーズに合わせた継続支援について考えさせられる一年でした。“歴史に学ぶ・歴史を創る”その重みを感じながら前進することを願っています。

(会報担当:小田・鷹野)

日本看護歴史学会会報 第59号

企画・編集 小田 正枝(国際医療福祉大学)
鷹野 朋実(日本赤十字看護大学)

発行責任者 山崎 裕二(日本赤十字看護大学)

印刷 株式会社 新和印刷

事務局 〒150-0012

東京都渋谷区広尾4-1-3

日本赤十字看護大学

山崎 裕二

TEL 03-3409-0613

e-mail yamazaki@redcross.ac.jp

川原由佳里

TEL 03-3409-0185

FAX 03-3409-0589(代表)

e-mail kawahara@redcross.ac.jp

学会HP <http://plaza.umin.ac.jp/~jahsn/>